

石坂幸子とモスクワ放送

——元 NHK 女子アナウンサーが見た戦後直後の ハバロフスク放送局日本語放送

島田 顕[†]

Ishizaka Sachiko and Moscow Radio:

First female Announcer of Moscow Radio Khabarovsk Station Japanese Section
after WWII

Akira Shimada

Ishizaka Sachiko was the first female announcer of Moscow Radio Khabarovsk Station Japanese Section (VRK Khabarovsk Group). She worked as an announcer of Nippon Hoso Kyokai (Japan Broadcasting Corporation) Karahuto (Sakhalin) Toyohara (Yuzhno Sakhalinsk) Broadcasting Station in the period of World War II. After the War, Toyohara Broadcasting Station was dissolved and she was transferred to Khabarovsk and worked as an announcer of Moscow Radio Japanese section. Then she resigned from Khabarovsk Station, returned to Japan via Kharahuto Toyohara in 1949. Her personal documents and materials were discovered in the NARA (National Archives and Records Administration) in America.

Purpose of this paper is to clarify activities of Ishizaka Sachiko from her birth to return to Japan and consider her contribution to Japanese programs from Khabarovsk in the early days based on the historical documents and materials.

This paper consists of four sections: first, Summary of studies for History of Japanese POW, Radio Moscow and personal documents of Ishizaka Sachiko in NARA; second, Her personal history from birth, character, graduation of Nippon Joshi Daigaku (Japan Women's University) in Tokyo and the training and works in the NHK in Tokyo and Karafuto Toyohara in the period of War; third, Lives in Karafuto Toyohara from the end of war to Khabarovsk, Works of Moscow Radio Japanese Section in the City of Khabarovsk, Works and lives in Karafuto Toyohara after Khabarovsk, return to Japan and activities after return to Japan; fourth, Generalization of study of Radio broadcasting of Japanese program to Japan and Ishizaka Sachiko.

1. はじめに

(1) シベリア抑留研究の視点から

第二次世界大戦後、60万人以上の満州等にいた日本人の軍人、民間人がソ連軍に連行され、旧ソ連諸国のほぼ全域、シベリア地域だけではなく、モスクワ近郊などのヨーロッパ・ロシア部、ウクライナ、カザフスタン、ウズベキスタン、キルギスタンや、モンゴルにおいて強制労働に従事させられた。これがシベリア抑留である。これら日本人抑留者たちは、いわゆる「シベリア三重苦」（飢えと

[†] 早稲田大学アジア太平洋研究センター特別センター員・関東学院大学経済学部講師

寒さと重労働)を強いられた。抑留者たちのうち、6万人以上が日本に生きて帰ることができなかった。さらにシベリア抑留により戦後ロシアに留置された日本人の多くは兵士たちだったが、抑留者は軍人だけではない。多くの民間人も日本に帰還することが許されなかった。これら民間人も抑留者に含めるべきであることはもはや当然のことである。特に軍人以外の民間人には女性たちもいた。たとえば、NHK・BS・1の特集番組「女たちのシベリア抑留」は主に看護婦の抑留に焦点を当てている(2014年8月12日放送)。生田美智子も看護婦を取り上げている(生田美智子 2016; 2017)。また富田武は長期抑留された中村百合子に触れている(富田武 2016a: 52-62; 2016b)。女性たちに焦点を当てる理由は様々あるが、第一に女性たちが男性たちよりも不安定な立場に追い込まれたケースが多いからである。

ここで取り上げる石坂幸子もその例にもれない。石坂は戦中、NHK 豊原放送局に勤務していたが、戦後にモスクワ放送に移って、対日放送に従事していた。その間石坂はロシアに残ることを余儀なくされ、日本に帰還することができなかった。その背景にはモスクワ放送日本語番組の拡充がある。モスクワ放送日本語番組は1942年4月にモスクワで開始された。当初の日本人職員は野坂龍(翻訳者)、片山やす(翻訳その他)と、アナウンサーはムヘンシャン=緒方重臣の一人だけだった(島田顕 2010)。そして、1935年に南北樺太国境を越境する形で亡命した元女優の岡田嘉子を、第二次世界大戦後の1947年にアナウンサーに迎え、日本語放送は一層の充実が図られることになる。また1946年12月には極東、樺太、シベリア地域にいた日本人たちを引き入れ、ハバロフスク放送局の日本語番組が開始された。そのハバロフスクの日本語放送に際し、抜擢された最初的女性アナウンサーが石坂だった。

石坂の例は、看護婦たちとはまた異なる事情であるが、個人個人の異なる様々な抑留のケース、事情を明らかにすることは意義のあることである。特に女性の例は決して明らかにされることがなかったし、また注目されることがこれまでなかったからである。それらの一つ一つの事情が明らかになり、それらを集めることによって、全体像を描くことが可能になるだろう。それではどのような事情で石坂は抑留されることになったのだろうか。本稿の目的は、石坂幸子のモスクワ放送入局の経緯、活動、その後辿った人生、そしてその意義を明らかにすることにある。

(2) モスクワ放送研究の視点から

2010年に発表した拙稿は、ともすれば岡田嘉子一色に覆われてしまいがちなモスクワ放送日本語番組の歴史のとらえ方に一石を投じたといえよう(島田顕 2010; 2011; 2012)。つまり、実際には岡田以前にも放送が行われていて、その放送に実際に携わった人物(ムヘンシャン)がいたことを明らかにしたのである。放送局内の伝説や言い伝えをもとに、ロシアと日本の文書館史料を紐解き、実証することができた。その後もモスクワ放送の歴史に焦点を当て続けてきた(島田顕 2013; 2015a; 2015b; 2015c; 2016a; 2016b; 2016c; 2017a; 2017b; 2017c; 2018)。

モスクワ放送に携わった日本人職員たちは、結果的にはソ連のプロパガンダのお先棒を担がされることになった。だがそれらプロパガンダは共産主義イデオロギーのものだと一括りにして捨て去ってもよいのだろうか。プロパガンダには、純粹に政治的な部分のものもあれば、文化・社会に注目するものもあった。さらに激しい口調で相手陣営を攻撃するハードなものから、オブラートに包むように

して論点を指摘するソフトなものもあった。状況に応じて様々な手法がとられた。それらの様々な手法は一長一短に編み出されたものではなく、放送に従事した人々が長年かけて、批判と反省を繰り返しながら、そして経験を積み重ねながら、練られたものだった。それらの人々の努力がいかに大切なものだったのかを検証する必要がある。

また過去の放送内容が本当に政治宣伝、プロパガンダだけだったならば、放送は長く続くことはなかっただろう。架け橋としての国外向けの放送は、国家間の関係発展、善隣・友好、それぞれの文化・芸術、社会、科学技術に対する理解の深まり、相互交流の発展を求めている。放送に従事する人々も、このような自負があったからこそ、長年にわたり放送を続けることができたのである。

そして放送に従事していた人々の発掘も重要である。なぜならば多くの者たちが無名の人物であり、さらに偽名を名乗り、本名を隠して生活していた者もいたからである。彼らの生きた証を立てることは欠かすことができない。彼らの行為がいかに大切なものだったのかを立証しなければならない。

(3) 先行研究と史料について

石坂について、最もよく書かれているのは木村慶一の回想録である（木村慶一 1949）。川越史郎の著書もあるが、わずかに箇所しか触れられていない（川越史郎 1994: 64）。2つしかなかった史料状況から、加藤哲郎一橋大学名誉教授が、NARA アメリカ国立公文書館での調査の際、石坂の個人文書史料を発見し、持ち帰ったことは、大きな前進だったといえよう（石坂の NARA 文書は全部で 81 枚ある。通し番号がないことや、同じ話題が重複して記録されているために、以下本稿では一括して石坂 NARA 文書とする）。木村については NHK・ETV 特集の番組「ETV 特集 沈黙を破る手紙—戦後 70 年目のシベリア抑留—」で取り上げられたのだが、番組に協力する中で見つかった木村に関する NARA 文書も得た。木村について述べた拙稿（島田顕 2016）では、石坂については触れることができなかったが、石坂が木村と行動を共にしたことから、以後石坂についても注目し、文献・史料を探し続けることになった。さらには読売新聞の記事（『読売新聞』1949.11.11: 2）、『世界評論』での雑誌座談会（『世界評論』1950.2: 56-73）があることもつかんだ。石坂自身による手記を知ったことも大きかった（石坂幸子 1949: 74-80）。この手記をもとに、石坂を紹介したものの、紙面の都合から石坂に関するすべての情報を盛り込むことはできなかった（島田顕 2015: 3）。

本稿では、充実してきている石坂に関するこれらの史料を駆使して、さらに石坂を深く掘り下げてみたい。特に石坂 NARA 文書を中心にまとめるつもりである。なぜならば、NARAに残されている文書史料は、アメリカの占領当局、そして日本の警察が行った石坂への尋問によって作成された公的な性格のものだからである。また時系列でいえば、手記より NARA 文書の方が後に作成されているからである。さらに NARA 文書の中で石坂自身が手記の内容は自分が書いたものではなく、雑誌社の記者が書いたもので、誇張して書かれたと証言しているからである。だからといって、手記の内容が全くの嘘とは言いきることはできない。手記の内容を完全に否定する材料がないからである。それでも今までわからなかった全体像により近づくことが十分可能となったといえよう。

2. 生い立ちからハバロフスク入局まで

(1) 生い立ち

石坂幸子は1924年（大正13）2月21日に生まれた。父親は寅松，母親はキヨ（旧姓藤井キヨ，終戦時50歳位）である。父の職業は労働者とあるだけで詳細はわかっていない。石坂の出生地は兵庫県尼崎市だが，残りの住所は不明である（大阪市生まれであるとする文書もある）。本籍は新潟県三島郡来迎寺村西野だった。石坂の姉は山下英子（終戦時28歳）で，東京女子大学を卒業した。1947年5月，豊原から母親とともに帰国し，以後母親と一緒に暮らしている。姉の夫は山下衛（終戦時34歳）で，職業は林業技術者，王子製紙株式会社樺太支社豊原林業課に雇われていたが，1947年5月に帰国した後は，東北パルプ会社新潟支店の輸送課長となった。石坂には弟がいたが，1927年の誕生直後に亡くなった。樺太に残っている親戚はいない。

1925年から1931年4月まで，樺太大泊町王子倶楽部寮に住む。父親が存命の頃から王子製紙関連の宿舎に住んでいたことから，父親も王子製紙に勤めていたことが想像できる。1931年から1932年4月まで，新潟県三島郡来迎寺村字中島，また東京に短期間住んでいた。父親の転勤に伴う移動と思われる。1933年から1940年まで，樺太豊原市北2線東8番地に住んでいた。その間，樺太豊原の小学校（6年制）を1936年に卒業し，樺太豊原の豊原高等女学校（4年制）を1940年に卒業した。そして1940年には東京の日本女子大学文学部国文科（4年制）に入学し，1944年9月に卒業した（大学在学中は大学寮に住んでいた）。この間，1944年（昭和19）6月に父親が病死している。

1944年9月に日本女子大学卒業後，石坂はNHKでの職を得た。1944年10月1日に日本放送協会のアナウンサー養成学校に入学（1944年10月5日から1944年11月20日まで），直属の上司は波木井醇だった。1944年10月5日に東京でアナウンサーとして採用され，役職はアナウンサーの研修員だが，給料は1カ月あたり58円だった。研修時代の1944年10月から1944年11月まで，東京市芝区田村町14番地藤井せいしろう（おじ）の元に身を寄せている。研修を終え，1944年12月に樺太豊原放送局のアナウンサーに就任。1944年12月から日本の降伏まで，豊原放送局に所属するアナウンサーとして勤務した。NHK豊原放送局時代の1944年11月から1945年8月まで，樺太豊原市内の王子倶楽部寮に住む。つまり王子製紙に勤務していた義兄の家に母とともに身を寄せた。常勤のアナウンサーになった後の給料は1カ月あたり60円と諸手当で，研修時代とあまり変わらなかったことがわかる。豊原放送局での直属の上司はおおい・すみお（漢字不明），また同僚としてまつやま・きよし，しょうない・ふみこ（漢字不明）がいた。手記によれば，NHKでは「婦人の時間」やニュース解説を担当するなど，樺太での生活は楽しかったようだ。

(2) 人物

石坂は，意志の強い芯のある人間である半面，自分から進んで前に出ることはなく，控え目な人間だったようだ。石坂NARA文書には「石坂は口数が少なく，生来，節度のある従順な女性，本質的に中程度であり，会社でも家でも隣人との付き合いは皆無であった」と述べられている。雑誌座談会でも，戦後の製紙工場の体制について（ロシア人の監督下に置かれていたこと），放送局の体制について（共産主義教育を受けなかったこと，給与体系について，自分は特級で木村慶一は2級であったこと），ソ連社会の監視社会状況（監視されるようなことはなかったこと）について話しているの

みである。

木村は、石坂が和服姿で出勤したことや、カール・マルクス通りに着物姿で現れたことを記している。石坂の意志の強さを表している事実といえよう。3年間さらに勤務するという契約書にサインするよう迫られたが、3年間の契約期間が終了した時に日本に帰国させることを保証したものではないとして拒否した。抗議のしるしとしての和服での出勤だった（木村慶一 1949: 59）。さらに意志の強さとプロ意識がわかるエピソードとして、石坂が「このテキストは、とても、私には、読めません」と言ってアナウンスを拒否したことを挙げている（木村慶一 1949: 67）。訳文の出来が悪く、日本語として通じないテキストが渡され、石坂が日本語の専門家であるために、読み上げを拒否したということである。

石坂 NARA 文書では、石坂の風貌、言語、家族の状況、政治的関心もしくは思考傾向についても述べられている。風貌については、身長は約 163 センチメートル、体重は約 50 キロ、目は薄茶色、まゆは薄く、滑らかな瞼（切れ長の目ということか）、眼鏡はかけておらず、髪は黒髪で三つ編みにしている。顔色は日焼けしている。目立った顔の特徴として、右上の歯に金歯があり、全般的に歯の状態は悪く、寸詰まりの鼻の下の短い上唇は口唇裂（兔唇）に似ているという。言語については、ロシア語はかなりよく書くことができ、辞書の助けを借りて翻訳できるが、ロシア語での会話はできない。豊原とハバロフスクにいたときにロシア語を学んだという。英語は女学校、女子大学で勉強したが、話すことはできない。読んだり、書くことはかなりできる。

家族については、母親と一緒に暮らしていて、石坂と母親は、会社から支払われた石坂の給料で生計を立てている。生計は正常で、生活状況は平均的なものであり、財産は話すほどのものはない。石坂の両親は貧しく、無教養で、労働者階級ではあるが、子供たちが教育において最善を尽くすこと（最高の教育を受けること）を望んだので、子供たちを大学に入学させたという。石坂は、卒業後は学校教師になりたくて日本女子大学に入学したが、ラジオアナウンサーの仕事に興味を持ち、この分野のことを勉強し、日本女子大学を卒業後、NHK の研修生アナウンサーとして採用され、後に豊原放送局で常勤職の地位を得た。

政治的関心もしくは思考傾向については、石坂 NARA 文書では急進思想の女性ではないと記されている。思考傾向については、石坂の言葉や行動には、過激な思考や政治活動は見られない。自身が述べるところによれば、イデオロギーなどに関し、ソビエトによっていかなるタイプの調査も受けたことがないということだった。またソ連当局から日本でのどのような任務も遂行するよう決して持ち掛けられなかったし、いかなる任務も遂行しなかったし、共産主義教育を受けたことはなかったと主張した。後述するように、鉄のカーテンの裏側を見たいという衝動がハバロフスク行きを決意させたということだったが、裏側を見てどう思ったかのかを表しているものは何もない。

3. ハバロフスク入局から帰国後まで

(1) ハバロフスク入局の経緯

1945 年 8 月に終戦を迎え、NHK 豊原放送局はロシアの樺太占領、日本の降伏により閉鎖・解散させられ、豊原放送局の石坂と他の職員は失業状態に陥った。1945 年 10 月、ソビエト文民局は、元のアナウンサーたちに登録するよう通達を出した。石坂と 3 人の同僚は元の豊原放送局の局舎にやって

きて、登録した。このとき、石坂は自身の経歴について質問された。

手記では、終戦のどさくさで、「婦人放送員は強制的に徴用されて、どんな目に逢うかわからないから」という上司の所長の言葉を信じ、心ならずも辞表を提出したことが述べられている。身の安全を図るために、一時的に提出した辞表が正式に受理され、だまされるかたちでNHKをやめさせられてしまい、「憤おしくもある」と述べている。だが石坂NARA文書では、辞表提出については書かれていない。手記と石坂NARA文書の食い違っているところである。NHKの上司が本当に石坂をだましたのかどうかはわからない。だが上記の職員たちと石坂が異なった道を歩むことになったのは間違いない。辞表提出が本当に行われたのならば、上記のように他のNHK職員と同様に文民局で登録したとしても、石坂だけが目をつけられた理由になるだろう。

1945年8月23日から1946年12月30日まで、石坂は樺太豊原の王子製紙の事務員として働くことになった。1945年11月5日には、王子製紙総務部総務課に移り、月給150円となり、王子製紙の直属の上司で工場長兼常務取締役である河内山光直のためのコピータイプの仕事を担った。1946年3月に、石坂は肺炎のために仕事を休んだ。しかし、4月のソ連の労働法の施行に伴い、石坂は製紙会社での仕事を再開することを余儀なくされた。その後まもなくして、石坂の給与は月に450ルーブルに引き上げられ、秘書としての地位が与えられた。給料は、採用始めは150ルーブル。1946年4月までに1カ月あたり450ルーブルに賃上げされた。

1946年の春、新生命新聞（樺太でロシアの占領軍によって発行された新聞）のソ連当局者は河内山に、王子製紙から2名の有能な人物を新生命新聞のための連絡通信員として働くために出向させるよう要請し、河内山は工場の労働課長で書くことが趣味である大村嘉彦（40歳から45歳位）とラジオアナウンサーの仕事の経験を持っていた石坂を抜擢した。河内山の推薦で、石坂、大村に加えて、山田辰夫が新生命新聞監督官で新聞社社長であるミシャロフ中佐の仕事のために任命された。石坂は当初、出向を拒否した。自分がソビエトの協力者というレッテルを張られることを望んでいなかったからである。しかし、最終的に受け入れた。石坂には他に選択肢がなかったからである。石坂と大村は新生命新聞の事務所でミシャロフの簡単な面接を受けた。ミシャロフは、王子製紙工場の労働者の進捗状況を報告する定期的な報告書（レポート）を提出するよう要請した。報告書は採用されれば新聞に掲載されるということだった。

1946年10月15日、新生命新聞の全従業員は、1945年10月に設立された新生命新聞社の創立一周を祝った。日本人従業員全員と数名の高位のソ連職員が新生命新聞の建物で開催された集まりに参加した。大村と石坂は依然として王子製紙の労働者として登録され、勤務していたにもかかわらず、新聞社との連絡通信員としての立場からこの集まりに参加することになった。ミシャロフはこの集まりに欠席したが、ミシャロフのアシスタントで新生命新聞の監督補佐官兼編集補佐（副編集長）であるバンドウ中佐が集まりを主宰した。このとき石坂は、流暢な日本語を話すバンドウに紹介された。集まりにはバンドウと密接な関係にあった朝鮮人の金デクヘンも参加した。集まりの間、特派員による会議が、議長を務めたバンドウの監督の下に開催された。

1946年11月、自分の名前が日本への帰還リストに含まれていないことをつかんだ石坂は、不安を覚え、文民局に問い合わせを行ったところ、指定された送還者数がすでに決まっているので、自分の送還は次の機会まで延期されると言われた。このときの送還者の輸送は、1946年に樺太から離れる

最後のものだった。

1946年12月上旬（第1週）に、石坂は新生命新聞の編集室に報告するために出頭するよう告げられた。実は石坂を面接するために新生命新聞のバンドゥラが呼び出したのである。バンドゥラは、石坂の個人的な事情（石坂の経歴、家族の状況など）を尋ねた。さらにバンドゥラは石坂に帰還の意向について質問した。これに対して石坂は、アナウンサーとしてラジオの仕事を続けると答えた。石坂は、モスクワでのアナウンサーの仕事に興味があるかどうか尋ねられたが、興味はないと答えた。以下は会話の内容である（B：バンドゥラ；S：石坂）。

B：あなたは、日本に戻った後に何をするかを計画していますか。

S：私はおそらくラジオ分野での仕事を続けるつもりです。

B：あなたは放送の仕事をするためにモスクワに行きたくはありませんか。

S：私は行きたくありません。

B：そのことをよく考えてみてください、そして、明日答えをお願いします。

翌日、石坂はバンドゥラの指示どおり、バンドゥラに会いに行き、モスクワでのラジオの仕事はしないと答えた。それ以上議論することなくこの会合は終了した。上記に続いて、石坂のところに金と山田がやって来た。山田は石坂に、バンドゥラからのオファーを受け入れるよう促したが、石坂は断った。ここで特筆すべきは、石坂に最初持ち掛けられたのは、ハバロフスクではなくモスクワでの仕事だった。

バンドゥラは1946年12月に王子製紙の工場に何度もやって来た。バンドゥラは石坂に、自分がハバロフスクへの転勤を命じられ、日本向け番組を放送するラジオ放送局を組織する責任を負うことになったと述べた。こうした事情により、日本人のアナウンサーの募集が行われていた。バンドゥラは、NHK豊原放送局に関する石坂の事情（石坂のラジオアナウンサーの経験）を当然知っており、ハバロフスクでの自分の仕事のために石坂が欲しいと述べた。石坂は最初、バンドゥラの申し出を断ったが、バンドゥラは自分自身のために石坂が働くことに固執していた。

1946年12月29日、石坂は、再び王子製紙の工場の自分の仕事場でバンドゥラと金の訪問を受けた。バンドゥラは、石坂がハバロフスクで自分自身のために働くことを持ち掛けようと、再度石坂に近づいたのである。石坂は、ロシアに行くことを希望するかどうかもう一度尋ねられた。石坂は最初、彼らの提案を何度も拒否したが、自分が送還されるまでにもう2、3年かかるかもしれないとわかっていたので、大陸を見たいと思い、少し冒険したいと感じていた。これは石坂が鉄のカーテンの後ろ側を観察する絶好の機会のように思われた。まさに米軍当局の尋問の際石坂は、大陸を訪問し、また鉄のカーテンの背後の状況を観測したいという願望が、放送局の仕事を引き受ける際に自分に影響を及ぼしたと述べた。石坂は次のように返答することによって、しぶしぶ同意した。「2、3年でなければ、私は行きたくない」と。バンドゥラは、石坂に高い賃金と高い生活水準を約束した。結局、石坂は折れ、最終的に自分が2年から3年以内に送還されるという約束に基づいて、バンドゥラの申し入れを受け入れた。石坂は、自分が送還される時期がいつかわからないため（いつ送還されるのか確信が持てなかったから）、樺太またはハバロフスクにいることに実際の違いはないと判断した。ま

た石坂はバンドゥラを信頼し、バンドゥラが約束を守ることを信じていた。バンドゥラは石坂に、ハバロフスク行きの飛行機で翌日、豊原を出発する準備ができていると述べ、翌日ハバロフスクに向けて出発するので、そのための準備ができなければならないと石坂に語り、旅行に必要な指示を与えた。王子製紙工場の金も、石坂と一緒にハバロフスクに行く予定であり、ラジオ放送局の朝鮮語課に所属し、勤務することになっていた。金も工場からの連絡通信員として働いていた。

石坂は母親と話合った。母親はこの問題について、激しく反対し、石坂に断るよう言った。翌朝、石坂は新生命新聞事務所でバンドゥラと会い、母親が反対しているために自分はバンドゥラの申し出を受け入れることができないと語った。バンドゥラは石坂の話を聞き取ることを拒否し、石坂に退去を命じた。その後、バンドゥラと少佐で政治委員のマリアシン、そして金は石坂の母親を訪問し、ハバロフスク行きは石坂にとって良い機会になるだろうと話した。許可を得、石坂は大沢飛行場に自動車で運ばれ、同行したバンドゥラと金と一緒にハバロフスクへと飛び立った。

手記では、NHK を辞めた後、新生命新聞の記者となり、日本人の工場での様子などを伝えたのである。ここには、王子製紙勤務のことは書かれていないし、新生命新聞との連絡通信員だったということについては「通信寄稿」ということと、レポートの回数（2回）が記されているのみである。石坂 NARA 文書では回数についての言及はない。新生命新聞の上司のロシア人からハバロフスク行きを勧められ、最初は断ったものの、説得され、「2年で帰還することができる」という言葉を信じ、家族の反対を押し切り、ハバロフスク赴任を決意したことでは石坂 NARA 文書と手記は同じである。

(2) ハバロフスクでの勤務

1946 年 12 月 30 日、石坂を含めた 3 人は大沢飛行場で飛行機に乗った。約 2 時間半後、3 人はハバロフスク市近郊の飛行場に着陸した。着陸後石坂は、ハバロフスク市内に運ばれ、放送局に到着したのは晩近くのことであった。そこで石坂は、ハバロフスク放送局のマネージャーになるためにモスクワからやってきたという民間人のカメリコフと出会った。ここで民間人であるスモーリン、軍属のヴァルドゥリ中佐に紹介された。511 名がハバロフスクラジオ放送委員会の職員であったという。紹介後石坂は、カメリコフによって極東ホテルに連れて行かれ、ホテルの 4 階の部屋が与えられた。ハバロフスク滞在中石坂は、ハバロフスク市内のカールマルクス通り 20 番地にあるこの極東ホテルに住んでいた。

翌日の 1946 年 12 月 31 日、石坂がハバロフスクのラジオ放送委員会に出頭したとき、石坂は自分がハバロフスクで働くことを初めて知った（この部分は矛盾しているように思われるが、大沢飛行場で飛行機に搭乗したのちにハバロフスクに行くことを知ったということが記されている文書もある）。石坂は自分の技能に関する様々な試験を受け、ソ連ハバロフスクラジオ放送委員会に所属する極東ハバロフスク局の日本語課に就職する資格が与えられた。上記の地位を引き受けると、石坂には毎月 500 ルーブルの給与が与えられ、放送ごとに 25 ルーブル（夜間放送の場合は 37.50 ルーブル）が支払われた。つまり作業量に応じた支払いだった。給与については、月に約 3,000 ルーブルから始まったが、1949 年には 1,500 ルーブルに下がったとする文書もある。

同日、石坂は翻訳者の東一夫、三宮貞一とアナウンサーをつとめる石井次郎、翻訳者とアナウンサーをつとめるチモフェーエフとバイコフ大尉を紹介された。全員がラジオ委員会の職員だった。東

と三宮は、ロシア人によって書かれた記事の翻訳者としてハバロフスク放送局に配属されていた。放送に使用される音楽番組とバラエティ番組は、通常モスクワで録音・翻訳されたものだった。

石坂はハバロフスク到着の翌日から、ニュースと解説を読むアナウンスの仕事を始めた。論評テキストはロシア人によって書かれたものだった。石坂が到着したとき、ハバロフスクからの日本語放送は放送開始から既に約1カ月が経過していて、1日に4回、各30分、延べ2時間の放送が既に行われていた。後に石坂はニュースと論評を読むことから外され、音楽番組を担当するアナウンスの仕事が与えられた。別の文書では、「捕虜ニュース、ソ連ニュース、世界ニュースと解説を含む毎日の30分間の放送〔を担当〕、特別な特権と自由を享受した」とある。手記では、「捕虜通信」、ソ連国内のニュース、解説のアナウンスを担当していたということである。石坂はその後、テキストの編集者としての追加のポストを得た。このポストはロシアの文学作品を日本語に翻訳するものだった。石坂の最初の放送はあらかじめ録音したものが放送されたが、後に生放送を行うようになった。

ハバロフスク放送局には日本語課以外に、中国語課と朝鮮語課があった。バンドウラは日本語課課長で石坂の直属の上司だったが、同時に中国語課課長でもあった。またロシア生まれの朝鮮人のカンが朝鮮語課課長だった。中国語課と朝鮮語課はラジオ放送局の日本語課の隣りにあった。

石坂の作業スケジュールには、週に6日、毎日4つの番組のアナウンスが含まれていた。日本向けラジオ放送は、朝の7時から7時30分まで、17時から17時30分まで、19時から19時30分まで、23時45分から24時15分までであった（石坂が1948年9月にハバロフスクから樺太に戻った後、スケジュールは7時から7時30分まで、19時から19時30分まで、20時から20時30分まで、23時45分から24時15分までに変更された）。石坂は、石井と交互にアナウンスを行った。男女が交互に読み上げるやり方である。

石坂は、自分の仕事が決まりきったもの、型どおりのものであり、自分がハバロフスクにいる間はあまり好きではなく、あまり多くのことをすることはなかったと述べた。それほど大したことではないとも述べた。一方手記では、ハバロフスクでの生活は石坂にとって本当に有意義なものだったと記されている。また待遇も良く、樺太に残っていた母親に長距離電話をかけることもできたことも書かれているが、このことは石坂 NARA 文書にはない。また手記は、石坂がハバロフスクでNHK放送も聞くことができ、日本の配給その他の事情がまだ悪いことに胸を痛めていることも記している。

1947年2月の初め、石坂は自分の履歴書に関するバイコフの面接を受けた。この面接は、ハバロフスクのラジオ放送委員会の建物で行われ、約30分間続いた。面接でバイコフは石坂の写真を求めた。石坂は樺太で撮影された自身の写真を履歴書に貼ってバイコフに渡した。石坂は自分の履歴書に関する2度の面接を受けた。石坂がソビエトに滞在している間、一度目に写真を撮影され、二度目には自身の写真をバイコフに提供した。

1947年3月、木村が樺太豊原からやって来た。木村は豊原で旧樺太新聞の記者だった。その後新生命新聞の仕事に従事していた。石坂と木村とは以前から知り合いだったようだ。木村の著書にハバロフスクで石坂が木村を迎え入れたときのことが描かれている。木村がハバロフスクに来たとき、石坂の試し読み（校正）の仕事と編集の仕事は木村によって引き継がれ、木村は放送原稿の編集長を務めるようになった。石坂の仕事は、アナウンスのみとなる。アナウンサーの仕事だけだったが、後に翻訳業務を含むバイコフのためのいくつかの作業に従事した。1947年4月、石坂の母親が豊原から日

本に帰国するために出発し、総額 5,000 ルーブルを電信でハバロフスクの石坂に送った。

1947 年 5 月、石坂は朝鮮語課のパーティーに招待された。この日、三宮とその妻は樺太に向けて出発した。ハバロフスクで三宮と一緒にいた妻が妊娠し、樺太に戻ることを望んでいたからだ。1949 年 7 月に石坂は、豊原で三宮と再会したという。また、ロシア人女性と結婚した東がモスクワでラジオの仕事をするためにモスクワ放送局に向け出発した。加えて、1947 年 6 月（1947 年 7 月とする文書もある）、石坂は自身が木村の愛人になることを受け入れ、1949 年 7 月まで一緒になった。木村によれば、石坂をソ連に留めておく工作としてモスクワ局への転勤や、ロシア人と結婚することを勧められているが、石坂はこれらも断っている。こうしたロシア側の工作をかわすために、形の上だけ、ともに生活することを選んだというが（木村慶一 1949: 121-131）、手記にも石坂 NARA 文書にも理由については書かれていない。

1947 年 12 月、日本語課にさらに 2 人の日本人が加わった。24 歳か 25 歳位の赤沼弘と川越史郎がやってきた。他の日本人は、29 歳の清田彰が 1948 年春に、1948 年夏には 28 歳の朝鮮人の柳学亀がやってきた。1947 年春にハバロフスク局を去った東と三宮の代わりだった。清田と柳の 2 人は翻訳者として働くようになった。石坂 NARA 文書では、石坂が 2 人がまだハバロフスクにいと信じていたという。

1948 年 1 月、石坂は肺炎のために入院し、女性医師クズメンコによる治療を受けた。病気から回復したときに石坂は病気休暇をとり、1948 年 4 月に再び病気休暇をとった。この間、石坂は、チモフェーエフの妻の訪問をしばしば受けた。その時夫のチモフェーエフが出張していたためである。

1948 年の春、石坂は自分の履歴書に関する面接を再度受けた。そのとき、石坂は再び自身の写真をバイコフに渡し、履歴書とともに提出した。1948 年 5 月に、石坂は仕事に戻ったが、重度の咳により放送は 5 分間に制限された。石坂は、自分の放送期間が短くなったので、より多くの翻訳作業をするようになった。

1948 年 8 月 17 日、石坂は樺太への帰還の命令をモスクワから受けた。同時に、石坂がサハリン行政局の管轄下にあったため、シベリアから直接帰還することができないとの通知を受けた。命令を受けて、石坂は公式パスポートの取得などの準備にとりかかった。石坂は、1948 年 9 月 4 日にハバロフスクの小さな写真館で写真を撮影した。この写真はヴァルドゥリ中佐の要請で撮影されたもので、ハバロフスクから豊原に飛行機で向かうときに石坂が使用したパスポートの識別手段として使用された。

ラジオ局から石坂が解雇された理由は、健康状態が悪く、日本への帰国を望んだためである。石坂はバンドウラとのどんな契約も結ばなかった（署名しなかった）。石坂が最初に退職願を出したのは 1948 年 4 月だったが、この要求はカメリコフによりモスクワに送られたものの、承認を伴う回答は 1948 年 8 月までなかった。1948 年 9 月に、最終的に帰還の許可を勝ち取ることができた。バンドウラは、ハバロフスクに留まるように石坂を説得しようとしたが、石坂は日本への帰還を心に決めていた。結局、石坂の帰還申請はバンドウラによって承認された。1948 年 9 月 4 日、石坂にチケットが与えられたが、飛行機に空席がないため、次の日まで飛行することができなかった。石坂は、木村ともう一人のハバロフスク放送局の同僚である金（デクヘン）とともに、1948 年 9 月 6 日に樺太豊原市に飛行機で帰った。こうして石坂はハバロフスクを去ったのである。

(3) ハバロフスクから再び樺太、そして帰国まで

豊原に戻った翌日の 1948 年 9 月 7 日に、新生命新聞の事務所に赴き、ハバロフスクでの仕事について報告するために（作業のためにとする文書もある）、ミシャロフの後継者であった新生命新聞の社長のアルヒペンコ中佐を訪問した。アルヒペンコは送還が再開されることを石坂に通知し、送還予定の新生命新聞の他の職員とともに石坂が送還されることを個人的に見込んでいた。つまり 2 人には一週間以内に帰還できることが告げられたのである。2 人は、豊原市にわずか一週間の短い滞在の間、真岡帰還センターに向けて出発するために準備し、そして 1 週間後、真岡帰還センターに向かった。

1948 年 9 月 15 日、石坂と木村、文民局の民間人通訳のニコライを伴った 30 人の日本人は真岡港に向かった。収容施設の囲みに入る前に、日本人たちに予防注射が打たれ、手荷物は内務局の将校（センター職員）によって検査された。

1948 年 9 月 17 日、ニコライは石坂に、収容施設の指揮官（名前不明、中佐）のもとに出頭するよう伝えた。収容施設指揮官の事務所では、新生命新聞事務所からの電話で送還が取り消されたことが石坂に通知され、豊原に出頭するように告げられた。石坂、木村、ニコライは港を出て豊原に戻った。つまり 2 人はソ連当局に拘束され、豊原市に送り返されることとなった。木村は到着直後、石坂の代理人としてアルヒペンコに突然の予定変更を確認するよう問い合わせた。この時点では理由は明らかではなかった。1948 年 9 月 18 日、石坂と木村は、ザイジノ（役職など不明）と一緒に送還委員会を訪問したが、2 人の書類は適切なものであるが、送還リストからはじき出された理由についての説明はできないと伝えられた。

1948 年 9 月 19 日か 20 日に、石坂は、内務局将校のラスマン中佐に連絡するようにとのアルヒペンコからの連絡を受けた。石坂と木村はラスマンから、2 人の懲らしめのために帰還が遅れたとの通知を受けなかった（2 人の帰還が彼ら自身のために遅れたとラスマンによって通知されたという文書もある）。繰り返し次のように告げられた。「あなた方はどちらもソ連に協力しているので、今日本に帰るのは賢明ではありません。ここに滞在するにあたり、新生命新聞のアルヒペンコがあなた方 2 人を採用します。当面のあなた方に対する支払いのための 500 ルーブルがここにあります」と。

木村は新生命新聞の特派員となった。しかし、石坂は人員の空きを待つよう求められた。石坂はラスマンに会いに行き、雇用するよう求めた。ラスマンはハバロフスク（南樺太の落合町女学校とする文書もある）での教師の地位を石坂に提案したが、木村が反対したために、石坂は教師になることをあきらめた。

1948 年 11 月には、新生命新聞の職員が本国に送還され、石坂が呼び出されて空席の 1 人を埋める常勤職の校閲者として迎え入れられた。給料は月 800 ルーブルだった。石坂は、1948 年 12 月に新生命新聞が閉鎖されるまでこの仕事を続けた。その後 1949 年 5 月まで失業状態だった。

1949 年 3 月 8 日、石坂は豊原でバンドウラに会った。バンドウラは石坂がハバロフスクに戻り、ラジオの仕事を続けることに興味があるかどうか尋ねた。バンドウラは、ハバロフスクのラジオ放送委員会の人員を募集するために戻ってきて、新たな人材として上田光隆、木村武雄、須田欽之介、有江逸郎を見つけたと述べた。石坂は、自分の送還を遅らせることになるとしてバンドウラの申し出を断った。

石坂は 1949 年 5 月 9 日に豊原の石鹼工場の段ボール製造部門（厚紙製造部門とする文書もある）

の労働者として働くことになる（直属の上司はロシア人だったが、名前は不明）。給料は 400 ルーブルだった。石坂は、自分が送還資格を得たことを知った 1949 年 6 月 10 日頃まで、この職場で働いていた。

木村と石坂は、ハバロフスクから帰ってきたときから一緒に住んでいた。石坂は、多くの日本人が自分を木村の愛人だと思っていたようだと認めた。しかし、石坂は自分が住む場所がないために、木村の家（1948 年 9 月 7 日から 1949 年 7 月 10 日まで、樺太豊原市大通り 9 丁目南）に住んでいたと主張した。

1949 年 6 月 20 日頃、石坂は樺太からの本国送還が再開されたという日本からの放送を聞いた。翌日の 1949 年 6 月 21 日に、石坂は州ソビエトの執行委員会委員に会い、自分が本国に送還されるよう求めたところ、すべての送還問題を処理していた市ソビエトの職員に訴えるよう指示された。石坂は市ソビエトの事務所を訪問し、執行委員会委員との面会の約束を求めて市ソビエト職員に直談判した（職員とやりあった）。市ソビエト職員は石坂に対し、面会は必要ではない、行われないと述べたが、送還問題を取り扱っていた送還委員会が主催した 1949 年 7 月 4 日の会議に石坂が出席する必要があると告げた。石坂はラスマンとの面会の約束を取ろうとしたが、叶わなかった。

1949 年 7 月 4 日、石坂と木村は送還委員会主催の会議に出席した。そこで 2 人が最後の豊原からの送還の適格者ではないことを知ったものの、2 人には何の説明もなかった。豊原からの送還は今回が最後という噂があり、だからこそ送還リストに含まれていたのかどうかを非常に心配していた。

1949 年 7 月 10 日、石坂は通訳を伴い州ソビエトの執行委員会委員と話をした。通訳は石坂に、木村と石坂が送還リストから委ねられるよう内務局が要請したと語り、石坂はラスマンに会うために内務局事務所に行った。それに続く会話は次のとおりである。（S：石坂；R：ラスマン）

S：あなたはなぜ私たちの帰還を止めたのですか。

R：すみませんが、私はそれについて何も知りません。

S：それはありえない。州ソビエトの通訳は私たちの送還を許可しないのは内務局だったと私に教えてくれた。

R：なぜあなたはサハリンに戻ったのですか。

S：日本へ送還されるためです。

R：そのために木村さんはあなたに同行したのですか。

S：確かに、彼は私が送還されることと同様に自分の送還を心配しています。

R：私はそのことを熟考します。明日 15 時 30 分に来てください。私はあなたに明確にお答えします。

翌日の 1949 年 7 月 11 日の 15 時 30 分に内務局の通訳に会い、石坂はハバロフスク行きを再考するかどうか尋ねられた。石坂は「いいえ」と答えた。翌朝石坂は、自分が送還されると約束された。石坂は通訳に、前年に自分が真岡港に送られ、そして豊原に戻るよう命じられたことを述べた。したがって、前年と同じことが繰り返されるのなら、自分は港に行かないだろうと語った。通訳は、石坂が今回は送還されるだろうと述べた。そして昨年送還されなかった唯一の理由は、内務局の許可を

得られなかった当局職員の過失によるものと説明し、会話の後石坂のために、市ソビエトとの面会を手配した。そこに到着すると、書記官は必要な書類を石坂に渡し、送還リストに木村と石坂の名前を含めた。翌日の1949年7月12日、石坂と木村は豊原を出発し、翌日真岡に到着した。1949年7月20日、石坂は送還船の間宮丸に搭乗した。

(4) 帰国後

石坂は1949年7月23日（7月22日とする文書もある）に間宮丸で樺太真岡から函館に戻った。石坂は1949年7月26日に、新潟県新発田市上町の姉英子と姉の夫の山下衛の家に着いた。石坂は姉の家にいた間、新潟県新発田市新御徒町の大原洋裁学校で洋裁を学んだ。またこの間、1949年11月17日に行われたソ連の革命記念日を祝う日本共産党新発田細胞後援の講演会で、石坂は「ソ連生活の紹介」と題し、講演した。

その後石坂は、新潟県三島郡来迎寺村西野の自分の母親のもとを訪れ、どのくらいの期間かはわからないが、滞在した。帰還後から1949年12月16日まで、東京の3つの婦人雑誌社から雇用の申し出を受けたが、石坂は申し出のいずれにも応じなかった。だが1949年12月16日、もしくはそのあたりの時期（1949年12月9日に）に、東京都板橋区板橋6丁目の王友会更生寮（王友寮）に移動、滞在した。東京都銀座4丁目に位置している苦小牧製紙株式会社本社の福利厚生課図書館支所に雇われたためである。そこで1950年8月まで働いたが、1950年8月29日に新潟に戻っている。石坂NARA文書には、東京での石坂の活動は不明で、転出、転入の間の動きについては何も知られていないとある。目立った活動がないのは事実である。また文書には「現在のところ、石坂はどんな政党や組織にも関係していない。そして石坂は共産党員の活動に全く参加していない。親共産主義活動は全く見られない」と書かれており、石坂の共産主義活動へのコミットを懸念している。

石坂は新潟県に戻った後、1950年10月以来結核で長らく寝たきりとなっており、新潟県新発田市の勝浦重康医師の診療を受けていた。石坂NARA文書によれば、1950年10月から1951年4月までの間に、石坂は自宅で5回、捜査官による尋問を受けた。石坂の主治医は、尋問を最小限に抑えるか、石坂の健康状態が悪いために尋問するべきではないと捜査官に要請した。主治医はさらに、石坂に1時間以上尋問しないよう求めた。上記のような状態のため、石坂は図面（証言に関連した地図や建物の配置図、建物内部の見取り図と思われる）を描くことはできなかった。1951年4月13日の石坂の最後の尋問以降、病状がさらに危険で重篤なものとなっており、2カ月間か3カ月間、石坂に対する尋問を中止するよう、捜査官は石坂の主治医から要請された。以上を踏まえ、石坂は嘘発見器による検査にかけられなかったという。石坂の医師は、石坂の結核の症状が非常に危険なものであり、石坂が回復するかどうかかわからないと述べた。石坂は、ソビエトによって日本での何らかの任務の遂行を持ちかけられることは決してなかったし、共産主義を教え込まれることはなかったと主張した。尋問では石坂は協力的で、すでにソ連の人物たちについての情報を米国機関に伝えていたが、この地域の捜査官は、石坂をプロジェクト・スティッチ（ソ連の戦略的重要拠点を抑留者たちから聞き出すプロジェクト）のリストに保持する必要があると考えていた。

ここで注目すべきは、米軍当局も石坂証言の中の矛盾に気付いていたことである。だからこそ石坂が信用ならず、嘘発見器にけることを含めて、さらなる尋問が必要と判断したのだろう。抑留帰還

者に対して、嘘発見器による尋問が行われていたこと、また地図や建物の配置図、建物内部の見取り図の作成が、尋問の中で大きな比重を占めていたことがわかる。石坂の証言に矛盾があるからこそ、プロジェクト・スティッチから石坂を外すことはできなかったのだろう。

4. おわりに

楽しかった石坂の樺太での生活を一変させたのは、ソ連との戦争だった。優遇されていたとはいえ、石坂が拘束され一定期間日本に帰ることができなかったことは事実である。このことは石坂がまぎれもない抑留者の一人であることを如実に表している。加えて米側も、「石坂は拘束キャンプにまったく送られなかった」としているが、ハバロフスクでの生活を「勾留」と見なしているようだ。ただし、石坂が得た経験は、特殊な例といえる。石坂の経験と似たような経験を味わった者は、放送局関係者以外にはいない。

石坂が日本に帰るのを許された理由は、肺炎・結核になったからであるし、また石坂自身が帰りたいと思ったのも病気にかかったからである。手記では、望郷の思いと、自責の念が芽生えたことが語られている。ソ連の生活が豊かで充実したものになるにつれて、外国人の自分はそこで安穏と暮らすだけでよいのだろうか。そして、自分も日本の復興に尽力したいと考えるようになったとあるが、これはあくまでも建前であろう。

石坂 NARA 文書にはいくつかの矛盾が見られる。例えば、豊原に戻った後の石嶺工場についての木村の証言との食い違いである。石坂は石嶺工場で働いていたと証言しているが、木村の NARA 文書では、1949 年 2 月に石嶺工場を組織することを命じられたが、乗り気の日本人が一人もおらずとん挫したとある。日本人が石嶺工場の組織に気乗りしなかったのは早く日本に帰りたかったからだろう。石坂は、雑誌座談会では石嶺工場について話していない。このことは手記にもない。証言の食い違いの理由として考えられるのは、木村の証言にある石嶺工場と石坂が勤務していたものとは別の石嶺工場だったということである。木村が石嶺工場を組織することを持ち掛けられたのが 2 月で、石坂が勤務し始めたのが 5 月であり、時期的に異なっているので、別の形で石嶺工場が組織され、そこで石坂が働きはじめた可能性が高い。これ以外にも石坂の証言に矛盾があることは米軍当局も認識していたからこそ、嘘発見器にかけるなどのさらなる尋問を予定していたのではないだろうか。

ところで、ソ連側はなぜ本気で石坂をソ連領内に留めようとしなかったのだろうか。ソ連側は石坂を留めようと、日本への帰還をあきらめさせようとしていたことは確かであるが、本気の度合いが全く感じられない。上述の通り、石坂が肺炎・結核に罹ったことが帰国の意志を固めることになった。だから石坂の病気を治すことによって、石坂の帰国を思いとどまらせることもできただろう。そのためには当時としては高価な薬だったが、ペニシリン投与もできたはずである。戦後直後、アメリカ軍にはペニシリンがあったことが知られているし、ソ連にも同様にあったことが考えられる。だがソ連側はそこまではしなかった。その背景に、替えはいくらでもいるという考えがあったのではないだろうか。つまり石坂たちは捨て駒に過ぎないと考えられていたのだろう。つまり人命軽視の考え方である。その証拠に、バンドゥラは豊原でさらに日本人をリクルートしている。しかしながら、人命軽視の考え方はアメリカ側にも見られる。石坂からさらなる証言を引き出したければ、石坂の治療にペニシリンを提供し助力すべきだった。石坂の治療に米軍当局が協力した形跡は文書には見られない。

石坂 NARA 文書から、戦後直後のハバロフスクからの放送について知ることができた。放送スケジュール（放送時間）は GARF ロシア国立ロシア連邦文書館文書に書かれていたものと同じである（ГАРФ, Фонд Р 6903, Опись 25, Дело 43.）。ハバロフスクからの日本語放送が開始されてから約一か月たった時に石坂が放送局に赴任したということもわかった。赴任当初、石井と交互に原稿を読み上げたことも興味深い。これはおそらくラジオ放送の経験があった石坂から提案したものと思われる。さらに、生活に関連したものとしては、給与額、給与体系を明らかにしている。

加えて石坂 NARA 文書により、ハバロフスク放送局日本語課の人的つながりが明らかになった。つまり石坂以前の職員（石井、東、三宮）、石坂勤務時以降（木村、赤沼、川越、柳、清田）、さらに石坂の退職以降に上田、有江、須田、木村武雄と朝倉勝江が勤務したことがわかった。特に木村と朝倉の夫妻から岡田和也（ハバロフスク日本語放送廃止時のチーフアナウンサー）へは、岡田の赴任時の指導係が朝倉だったこともあり、直接のつながりがある。東はその後モスクワ局に転任したために、RGASPI ロシア国立社会政治史文書館（ルガスピ）に個人ファイル文書が保存されており（РГАСПИ, Фонд 495, Опись 280, Дело 456.）、拙稿もある（島田顕 2015: 245-257）。東と同様、石井もモスクワに転任したため、ルガスピに個人ファイル文書があり（РГАСПИ, Фонд 495, Опись 280, Дело 458.）、小文もある（島田顕 2018: 8）。有江、須田、三宮、柳については不明である。また、石坂 NARA 文書では吉田明男、滝口新太郎については触れられていない。吉田については高杉一郎の著書がある（高杉一郎 1992: 210-213）。滝口もモスクワに転勤となり、岡田と結婚したことは周知の如くであり、滝口の文書もルガスピにある（РГАСПИ, Фонд 495, Опись 280, Дело 457.）。

手記では、NHK 樺太幹部が石坂をだまして辞めさせたことが述べられていることから、2015 年の拙稿では「エスケープゴードとして石坂幸子を差し出した罪は免れない」と書いた（島田顕 2015: 3）。だが石坂 NARA 文書によれば、ソ連文民局が、解散させた豊原放送局の石坂を含む 4 人の職員を登録させたとなり、事情が異なっていることがわかった（本稿 3 章 1 節を参照）。それにしても、他の NHK 職員はどうなったのか、いつ帰還したのか、石坂との違いはどこにあったのか。これらのことを調べることによって、石坂が本当にエスケープゴードだったのかどうかを判明するだろう。このことに関連する『毎日新聞』の記事は、樺太にいた新聞記者たちがソ連当局に協力しなければ自分たちが肅清されるという危機感を持っていたことを示している（『毎日新聞』2016.12.5 morn: 4）。

帰国後、石坂は新潟県新発田市に戻った。だが、その後の消息は不明である。結核を患っていたが、完治したのかどうかもわからない。まずは石坂のその後の人生を知りたい。また石坂をさらに知るためには、石坂の母校である日本女子大学での調査、最初の職場である NHK での調査（豊原放送局の当時の状況など）、そしてハバロフスクでの調査、さらには新潟での調査が必要である。また関係の深い苦小牧製紙、王子製紙での調査も同様である。これらの調査を踏まえたうえで、さらに石坂の人生全体について語ることができるだろう。

最後に、石坂幸子とは何だったのか。その意義はどこにあるのか。まず、戦後直後の日本語放送を担った重要な一人であるといえよう。NHK 樺太放送局での放送業務の経験をモスクワ放送ハバロフスク局の職員たちに伝え、日本語番組を充実させた。また木村とともに「おたより放送」（捕虜通信）を始めた。このことは後の自由な番組作りにつながったといえる。残念ながら、これについては石坂 NARA 文書では述べられていない。時期的には戦中のプロパガンダと戦後のプロパガンダの過渡的

な時期に当たる。「おたより放送」が冷戦の影響を受けていることは既に述べたが（島田顕 2016b）、石坂がテキスト読みを拒否したというエピソードは、戦中のプロパガンダと同じであり（島田顕 2017b）、相変わらずニュースを詰め込みすぎる状況が続いていて、モスクワでの開始当初の放送から状況が何ら改善されることがなかったことを示している。戦後復興が落ち着いてきて、加えて冷戦が本格化することにより、冷戦下プロパガンダとしての日本語放送の改革が求められるようになる。これについては稿を改めて論ずるつもりである。

文献目録

史料

NARA, Records of the Army Staff (Records Group 319), Investigative Records Repository (IRR) Personal Name Files, 1939–1976 Japanese, Chinese Korean, Ishizaka Sachiko, XA537159, 095. (石坂 NARA 文書)

NARA, Records of the Army Staff (Records Group 319), Investigative Records Repository (IRR) Personal Name Files, 1939–1976 Japanese, Chinese Korean, Kimura Keiichi, XA537364, 355. (木村 NARA 文書)

ГАРФ, Фонд Р 6903, Опись 25, Дело 43.

РГАСПИ, Фонд 495, Опись 280, Дело 456. (東一夫個人ファイル)

РГАСПИ, Фонд 495, Опись 280, Дело 458. (石井次郎個人ファイル)

РГАСПИ, Фонд 495, Опись 280, Дело 457. (滝口新太郎個人ファイル)

日本語文献

生田美智子 (2016) 「終わらない戦争・シベリア抑留 (1) —佳木斯第一陸軍病院の看護婦たち—」『セーヴェル』, 第 32 号, 2016 年 3 月, 35–51 頁。

生田美智子 (2017) 「終わらない戦争・シベリア抑留 (2) —女たちの場合—」『セーヴェル』, 第 33 号, 2017 年 3 月, 5–25 頁。

石坂幸子「私はスパイではない 一年半を対日放送に暮らした女アナウンサーの手記」『婦女界』, 第 37 巻第 11 号, 1949 年 11 月, 74–80 頁。

川越史郎『ロシア国籍日本人の記録 シベリア抑留からソ連崩壊まで』, 中央公論社, 1994 年。

木村慶一『モスクワ・日本・ハバロフスクー対日モスクワ放送員の手記—』, 川崎書店, 1949 年。

島田顕 (2010) 「ムヘンシャン—モスクワ放送最初の日本人アナウンサーの軌跡」『早稲田大学アジア太平洋討究』第 14 号, 2010 年 3 月, 121–135 頁。

島田顕 (2011) 「ムヘンシャン：モスクワ放送最初の日本人アナウンサー」『The・ART・TIMES』, No. 8, October, 2011, 51–52 頁。

島田顕 (2012) 「日露駆けた『無辺者』追う, ◇『モスクワ放送』最初の日本人アナ, 波乱の足取り◇」『日本経済新聞』, 2012 年 2 月 9 日, 朝刊 40 面 [文化面]。

島田顕 (2013) 「伝えようとしていた人と伝えなかった人々—シベリア抑留者の消息とモスクワ放送—」『日ロ交流』, 第 226 号 (通巻 357 号), 2013 年 11 月 1 日, 3 頁。

島田顕 (2015a) 「石坂幸子：モスクワ放送ハバロフスク局最初の女性アナウンサーの人生」『日ロ交流』, 第 240 号 (通巻 371 号), 2015 年 2 月 1 日, 3 頁。

島田顕 (2015b) 「木村慶一さんの消息を探し求めて」『日ロ交流』, 第 243 号 (通巻 374 号), 2015 年 5 月 1 日, 4 頁。

島田顕 (2015c) 「東一夫関連文書 (ロシア国立社会政治史文書館所蔵)」『早稲田大学アジア太平洋討究』, 第 25 号, 2015 年 12 月, 245–257 頁。

島田顕 (2016a) 「モスクワ放送局日本語放送の先駆—延安新華広播電台」『日ロ交流』, 第 253 号 (通巻 384 号), 2016 年 4 月 1 日, 4 頁。

島田顕 (2016b) 「木村慶一—シベリア抑留者の便りを伝えた男」『ユーラシア研究』, No. 54, 2016 年 8 月, 29–30 頁。

島田顕 (2016c) 「第二次世界大戦中のモスクワ放送—モスクワからの日本語放送はいかにして開始されたのか—」『早稲田大学アジア太平洋討究』, 第 27 号, 2016 年 10 月, 125–134 頁。

島田顕 (2017a) 「キム・ギウンについて」『日ロ交流』, 第 265 号 (通巻 396 号), 2017 年 5 月 1 日, 4 頁。

島田顕 (2017b) 「開始当初のモスクワ放送日本語番組—放送内容と批判」『早稲田大学アジア太平洋討究』第 28 号, 2017 年 3 月, 211–224 頁。

石坂幸子とモスクワ放送

- 島田顕 (2017c)「キム・ギウン——知られざる戦時中のモスクワ放送日本語番組の朝鮮人スタッフ」『早稲田大学アジア太平洋討究』第 29 号, 2017 年 10 月, 71-83 頁。
- 島田顕 (2018)「石井次郎について」『日ロ交流』, 第 272 号 (通巻 403 号), 2018 年 1 月 1 日, 8 頁。
- 「ソヴェトの自由と対決する」『世界評論』, 1950 年 2 月号, 56-73 頁。
- 高杉一郎『同時代ライブラリー 93 シベリアに眠る日本人』, 岩波書店, 1992 年。
- 富田武 (2016a)「シベリア長期抑留者・中村百合子の謎」『セーヴェル』, 第 32 号, 2016 年 3 月, 52-62 頁。
- 富田武 (2017b)『シベリア抑留 スターリン独裁下, 「収容所群島」の実像』, 中央公論社, 2016 年, 171-174 頁。

新聞記事

- 「特派員メモ モスクワ ハエ名乗った日本人」『朝日新聞』, 関根和弘記者執筆, 2011 年 10 月 4 日, 朝刊 12 面。
- 「私はソ連の国賓だった 引揚げた対日放送担当者は語る」「踏止まるアナは岡田嘉子, 滝口新太郎 機械的な仕事に大臣以上の月給」「街に暴行, 日本人検挙」「五晩の取調べ 深夜の野原に放り出さる」「原稿は機関紙醜積のみ “モスクワ放送” 実はハバロフスク」「誰も知らぬ杉本良吉」「最高から最低の生活へ」「憎む暗黒政治 国外を恋うソ連人のさゝやき」『読売新聞』, 1949 年 11 月 11 日, 朝刊 2 面。
- 「メディアの戦後史 シベリアに消えた 5 人 1947 年 記者に『スパイ判決』」『毎日新聞』, 青島顕記者執筆, 2016 年 12 月 5 日, 朝刊 4 面。

テレビ番組

- 「BS・1 スペシャル 女たちのシベリア抑留」, NHK 本局, 2014 年 8 月 12 日放送。
- 「ETV 特集 沈黙を破る手紙—戦後七〇年目のシベリア抑留—」, NHK 本局, 2015 年 9 月 5 日放送。